

42

県立福岡病院外科部における 3年間(明治23年~25年)の手術について

小林 晶

福岡整形外科病院

福岡では幕末から名称を変えながら医育機関が存在し、最終的に明治21年4月改組、設立されたのが県立福岡病院である。現在の九州大学医学部の母胎である。

県立福岡病院外科部は初代院長大森治豊(1852-1912)が部長を兼任し、医員5~6名で診療を行った。これとは別に病院勤務医と開業医との連携、融和を推進し、研修も兼ねる目的で「玄洋医会」が明治22年6月に発足し、機関誌「杏林之葉」が発刊された。これには県立病院で実施された手術、病名の記録が残されている。比較的資料の揃った明治23年から25年(1890-1892)までの記録を今回まとめたので報告する。

手術件数は合計延べ1,505件である。当時は抜歯も外科部で84件が行われたが、これは除外した。また、化膿性疾患が多いため、数回の手術が同一患者に実施されている可能性はあるが、氏名の記載がないので正確な患者数としては算定できない。

疾患と部位を大まかに分類して頻度をみてゆくと、1位：感染処置(265件)、2位：骨関節疾患(219)、3位：肛門疾患(218)、4位：腫瘍(176)、5位：泌尿器疾患(156)であり、以下扁桃腺・リンパ腺疾患(108)、嚢腫(83)、癭痕形成(74)、狼瘡(40)、創処置(36)、鼠径ヘルニア(28)、先天異常(24)、切断(20)、末梢神経(15)、血管(3)などが続く。

これらをさらに分析すると次のようになる。当時は感染性疾患の猖獗が最大の特徴である。これらの中には、普通の化膿性疾患とともに特異性炎症として、結核(84件)、性病、放線菌症、ハンセン病などが含まれ、各々が形成する膿瘍、病巣の切開、廓清などに追われている。骨関節疾患にも骨髄炎が27件あり、肛門疾患の多さも目立つ。大部分は痔核、痔瘻であるが、後者が感染性であることは勿論である。

結核(84件)は頸部リンパ腺炎(40)が約半数を占め、次いで腸骨窩膿瘍、肋骨、睪丸、脊椎(カリエス)、大腿骨大転子部などがあり、関節には膝を主として結核性関節炎がみられ、関節拘縮に対する猛撃矯正(*brisement forcé*)を散見する。

腫瘍では癌が50件含まれている。部位は件数順では、乳、頸部、舌、直腸、陰茎、上顎、睪丸になり、直腸癌(5件)に対しては積極的に摘出手術が行われている。胃癌の記録はないが、理由は不明である。悪性腫瘍では肉腫も21件ある。最多部位は大腿部である。次いで上顎部にみられる。

分野別で特異なのは、末梢神経に対する手術が15件行われていることである。内訳は神経伸展術(8件)、神経切徐術(4)、神経縫合術(2)、神経腫切徐術(1)である。形成外科的が手術癭痕形成を始めとして、Thiersch植皮術(5)、造鼻術(2)が実施されているのも特徴といえる。

前身の福岡医学校で明治19年に行われたX脚の矯正手術について、演者は第104回本学会総会で報告した。これは優れた発想、技術に基づいた手術であった、この他、本邦初のポロー式帝王切開術を明治18年に行い、後の東大初代整形外科教授田代義徳をして「本邦に防腐外科を輸入した大功労者は、福岡の大森、池田(産婦人科部長)の二君である。彼らはその種子を輸入し、培養し、さらに一般に普及せしめた外科の恩人」と言わしめたほどであった。このレベルは県立福岡病院まで継承され、さらに九州大学の設置の大きな因子になったといえる。

今回の調査記録は手術の帰結として結果、予後、満足度の記載がないことは残念であるが、明治中期の疾患の態様、処置、技術などをうかがえる記録ではないかと考える。